

# 家政学における家族関係 (第1報)

— Mowrer による家族の結合について —

田 中 靖 子

## I 序 論

「家政学」はいまだ統一的科学としての確立をみていないが、広範な分野と幾多の基礎科学の上に徐々に形成されつつある。現在、食物・栄養・被服・住居及び家庭管理等の個々の分野で単独の研究がなされているが、いずれもそれらは、対象は「個人、家族及び共同生活体（地域共同体）」の生活と福祉に関連したものでなければならない。それでは対象となる家族の姿はいかなるものであろうか。これに答えるものとして Mowrer (Ernest R., p.H. D.) の著者「家族」(The Family, It's Organization and Disorganization) によって考察を試みてみようと思う。

家族についての研究は、第一にアメリカでのそれをあげることができる。社会学の発達に伴い、社会の病理現象の予防措置として個々の家族が顧みられるようになった。これはわが国においても該当することである。18世紀、イギリス及びそれより遅れること1世紀にしてアメリカで行われた産業革命に伴って次のような社会現象が現われた。すなわち大規模な工場生産組織は、農村から都市への大量の人口移動をもたらした。都市に集中した家は、その生産的機能をほとんど喪失し、婦人特に若い女性の中から賃金を得て家庭外の生産活動に従事するものの数が圧倒的に増大した。それ故、家事を放棄された家族が続出し、料理・裁縫等を知らぬ婦人が増大した。又、さらに、近代的な技術文明の進歩は家族の仕事を機械化し、標準化して、料理・裁縫・洗濯・掃除等の家庭の雑務や、家事上の労働や時間を著しく節約せしめるようになった。さらに、このようにして産業革命の結果、近代都市がいたるところに発達し、人々の都市集中の傾向はいよいよ盛んになってきたが、この都市における家族構成は、一般に、小家族、または二世帯家族で、夫婦と未婚の子女だけから成る家が多くなり、子女の数も著しく減少し、やがて成人になり独立すれば親を離れて新しい家庭を築いてゆくので個々の家庭の家族構成はいよいよ単純化される傾向にある。(1) このことは維新以後急速に近代産業が発達したわが国においても見られることである。

Mowrer の「家族」はアメリカ人の家族について論じたものであるが、以上見てきた史的環境の類似性は大きく、かつ、わが国における近代都市家族は田舎の伝統的色彩の濃い家族の状態よりもはるかに接近している傾向が存すると思われる。そのことを前提として Mowrer の「家族」を参考にして家族関係の研究の一端を実証的な分析を試みる仮説としてのぞいてみるのが目的である。

Mowrer によれば、家族の研究は大きく二つのグループに分れる。一つは「Organization (結合又は組織化過程)における研究」他は「Disorganization (崩壊又は解体化過程)における研究」で

ある。(2)(3)過去においては、この二つは全く異った探究を意味していた。すなわち、Organizationの研究は、その構成部分における家族の分析とか変化の過程が主とされ、親子・夫婦の心的態度(Attitude)と共通の反応を形成するところに見られる。夫と妻、親と子の関係において、これらの心的態度は独特の感情形態をとり、通常の向上心と希望や目標をもつ関心の同一性は、家族の種々の構成員の関係を明かにする。Disorganizationの研究は家族崩壊の種々の観点に対する影響をもった社会政策の研究、経営と管理の研究、人間の本質の研究に分けられる。前者の研究は結合の過程が調和した形態をとるという理由で、後者の理由はあまりにも逆に関係づけられる傾向がある。この結合と崩壊のカテゴリーは社会の解体において基本的な役割を演じている、元来、全く別種のものでなく同一過程における反応の過程であり、家族の病理現象を分析してみると、二つの過程が同一家族の中に共に発見できることが多いのである。Mowrerはこれらを、生理学上の用語でもって「同化作用」と「異化作用」に区別し、健全な生物体が存在するところに二者は同時に作用し、調和のために両者の働きが必要なことを説いている。(4)

## Ⅱ 家族の結合

家族は人間の歴史と共に古い社会集団であるが、現実の形態は時代を異にし、国を異にするに従って、又同じ国の同じ時代でも階級や職業が異なるにつれてかなり違っている。しかし、こうした違いにも拘らず、家族は「婚姻、血縁又は養子の紐帯によって結合され、単一の世帯を構成し、夫と妻、父と母、息子と娘、兄弟と姉妹としてのそれぞれの社会的役割において、相互作用と心的交通とを続けながら、共通の文化を創造し、維持する人々の集団である」(5)のである。

このように家族は、生物学的に結合され、社会的役割(Social rôle)すなわち社会が個人に対して期待をかけている、その期待に応ずべき責任をとることにおいて相互作用(Interaction)すなわち、個人の作用(Action)に対し、他の個人が反作用(Reaction)として働きかえし、心と心のふれ合いとしての心的交流(心的交通)(Communication)が果されるところに、社会の母体(The matrix of society)と呼ばれるような緊密な社会の一結合単位として存在するのである。

家政学における家族関係の研究は最も重要視されなければならない。その理由は、今一つ、家族は社会の母体であり、社会での uni-function は家族の multi-function から派生あるいは分離、移譲、分散していったものであって、家族で正常かつ順調に営まれている機能を正確に知ることにより、社会での正しい在り方も移譲の仕方でも検討することができる。その意味で家族で営まれてきた機能を時代を超越して分析することは家族の結合あるいは同過程の反作用である崩壊の研究上重要な要素となる。そして他の一つは、家政学の目的である安寧幸福を達成するため家族での正しい機能の在り方、現状の機能の営まれ方、その種類等の分析により、家政学上の他の研究分野でもっと発達前進しなければならぬ点を発見し、それらの分野(外的)と家族の独自の分野(内的)でもって、家政学の目的に向い前進しようと意図する為に。

以上のように、家政学における家族関係の研究には家族の機能の研究が中心となる。家族において種々の機能が果されるとき結合と調和が生れ、結合と調和が家族成員の間に充分見られるとき、家族の機能は順調に営まれていると云える。反対に、当然果されなければならぬ機能が果されぬとき崩壊の一過程上に、あるいは病理現象としての過程上にあり、崩壊、あるいは病理現象としての過程にあるとき何らかの機能の消出を見、不健全な家族と診断することができよう。

ここでは、先づ新しく生の喜びに満ちた一生命が家族という環境の中で人間となってゆくに必要な要因について(環境と依存期)述べ、次にその生命をも加えて、彼が一家族員になったその日か

ら果す機能について (家族関係の機能)、特に縮約して、最後に家族員のいかなる心的相互作用により家族の結合がなされているか (家族関係の機構) を述べる。

### 1. 環境と依存期 (Infancy)

“Man is not born human.” (「人は生まれながらにして人間ではない」) (6) というのは一つの公理である。彼は — 人間 (Human) になる豊かな可能性をそなえているけれども — 文化をもった社会に、一個の動物として生みおとされる。彼は誕生と同時に他の人々にとり囲まれるのを発見するのであるが、この人間の相互の間の関係は長い年代に亘って蓄積された慣習や、習慣等によって支配されているのである。新しく生れてきた新生児の関係 (Relations)、彼が受ける養護、ならびにまわりの人々から受ける取扱いの仕方、彼が偶然に生れおちた集団の文化等によって限定されるのである。彼はこの結合体の中において、彼の集団の文化によって彼の生得の衝動の発現の型を決定されながら人間となってゆくのである。そして、家族は個人が自己を見出す最初の集団であるが故に、人間の中核が家族仲間の中において発展せしめられる、ということは何ら驚くに足りないのである。さらにまた彼の本性がそのように打ち消すことのできないように、家族の中において形成されてしまったからには、個人が全生涯を通じてこの型の関係というものを、ほとんど欠くことのできない局面として見出すということもまた、より以上に何ら驚くにたりないことなのである。このようにして家族は個人に対し二重の機能を果すのである。すなわち、その中において人間性が発達せしめられて、かつ家族は多くの人間性の衝動が実現されるところの環境を供与するのである。(7)

以上は Mowrer が人間性の芽ばえについて説いたところである。人間性は人間のみを持つ特性ではあるがそれは一定の環境の下に生れ育てられてはじめて発揮されてくるものである。人間は Plasticity に富んだ固体として生れ、人的物的環境のもとで依存期をおくるのであるが、人の依存期は他の動物と較べ最も無気力でその時期が長い。このことは学習への可能性が大きく、小さなことが大きな影響として現われてくることでも理解できる。この時おかれた環境は、生涯消失することのない性格の形成に非常に大きな影響をあたえる。心理学者の立場からも次のように、社会学的環境の重要性を述べている。

性格形成としての生物学的基礎はすでに出生してしまつた以上仕方のないことなので、ここで扱う「家族関係」の問題から、社会学的基礎の重要性を取りあげよう。「性格形成の遺伝の役割は否定することはできないが、性格はもはや主として社会環境において形成されると見なければならぬ。性格における最も重要な社会的要因は家族である。このことを特に強調しているのは精神分析学の立場であるが、その立場によって最近では家庭環境ということが性格形成において非常に重要視されるようになった。ことに家庭における両親の愛情と権威とが児童の性格形成に大きな役割を果している。愛情への要求は人生の最初の過程においてまず母親によって満たされる。親子の関係において次に問題になるのは権威と服従の関係である。子供は親との関係において、権威に対する態度が形成され、それが後に教師に、傭主に、支配者に対する態度に転移される。専制的な父親よりは民主的な父親の方が子供の性格形成によい影響を与えることは言うまでもない。しかし、親が確固たる権威をもっていることは子供に必ずしも不安定感を与えるものではなく、むしろ、規律が親の感情によって左右される場合には、子供の性格形成に悪影響を及ぼす。子供が社会に出てからの仲間に対する反応の訓練として兄弟関係の重要性があげられる。これは協同、競争、友情、優越、指導などの特質が形成されるが、これらの好ましい方向にあるのは旧来の大家族より現代的少大家族においてであり、経済的有利性の大きな家族においてである。経済的不安定はより要求不満の

原因をつくり攻撃的態度の形成を容易に招く」のである。(8)

以上、Mowrer も心理学者も指摘されたように、乳幼児期から学童期に至るまでの間、特に家族関係のもつ結合状態の重要性が強調される。この時期には人間性の形成に画一的な要因を植えつけてしまい、以後その性格を矯正することは非常に困難となる。従って、この依存期に良き環境のもとで好ましい人間関係を養っておくことが重要な課題となる。

それではよき家族関係を形成し社会に貢献するために、又家族自体のために、家族はいかなる役割を負っているのでしょうか。

## 2. 家族関係の機能

家族は国家と同様、自然発生的な集団であり、従って社会制度としては複数的ないくつかの機能を果すいわゆる multi-functional なものであり、その点、意図的組織的、計画的につくられた学校や学会などのような uni-functional な制度と完全に区別される。そして、ある一つの社会的機能は一制度のみ果されるのではなく多数に複合 (Complex) されて遂行され、又一つの制度が一機能のみを営むのではなく種々の機能を重複して営んでいる。この最も代表的制度として家族があげられる。

家族員が家族の目的、関心、抱負を実現させるために負っている役割 (Röle) はいかなるものであろうか。その解答としては、社会制度 (Social institution) としての家族が社会から期待されているものと、家族関係の継続する過程において公認された機能とに分けて考えてみなければならないが、家族員の果す機能は間接的に社会の要求に答えているという確信のもとに、ここでは後者の家族関係の機能について、特に必須の要因とされるものにふれてみたい。

「家族の起源はわからない。家族生活の形跡があるという早期のあらゆる記録で古代から存続することが学者によって信じられている。」(9) このように家族が存在する、より早期の時期から家族員が果していたと思われる機能を知るために家族員の形態を横の関係 (夫婦関係)、縦の関係 (親子関係)、さらに家族員全体の三大別にして考えたい。横の関係に兄弟姉妹関係が加わると思うがここでは特にとりあげない。

### 夫婦関係の機能 Functions of marital relation

- (イ) 性の規制
- (ロ) 生殖
- (ハ) 親密な反応
- (ニ) 経験の拡大

### 親子関係の機能 Functions of filial relation

- (ホ) 文化の継承
- (ヘ) 子供の養育教育
- (ト) 宗教
- (チ) 娯楽

### 家族員全体の機能 Functions of whole family members

- (リ) 経済的相互依存
- (ヌ) 愛情的相互依存
- (ル) 安定

### 夫婦関係の機能

- (イ) 性の規制 性的表現の規制は夫婦行動について規定し、遂行されぬときはこれに制裁を加

え、さらに法律的效果が関与する。夫婦関係の基本的機能であるが、人間の基本的生理的要求をこれにより満足させるために、近代都市生活においてはこれを結婚の動機とすることが多い。(10) 多くの議論を出し性関係をより強調する傾向にあり、「反応への欲望の最も限定された局面を単に一つ構成するのである」(11) といひ結婚の重要機能ではあるが性的関係のみを強調するのは社会の抱く期待に不完全に答えることであり批判されなければならない。

(ロ) 生殖 生殖の機能は家族の夫婦に課せられた重要機能の一つで、国家の維持発展には一定の人口の確保が必要である。そのため家族に対し特に社会が期待しているのである。いずれの社会にも婚姻関係以外の関係から出生した子はいるものであるが、社会制度としての家族が特に保護され期待される点からそれらの保障は軽く扱われ区別される。社会制度の結晶体ともいふべき法律は厳しくこれに規制をあたえている。

(ハ) 親密な反応 Thomas の言う“Desire for response”——基本的要求の一つ——は夫婦関係の心理的要求を満足させるものである。正常な人間なら一人残らず、同情や配慮や理解などを熱求し、また夫婦が一体となって共通の企業にあたるということは、性的関係をより大きな交友という価値の一部にすることにより、性により大きな意義をもたせることになる。この親密な反応への欲求を満足させるところに、夫婦の対等の愛と依存の愛が生ずる。小家族への移行に伴い、家族の紐帯は弱まりつゝあるが、弱体化した家族をなお堅固ならしめるのは愛情の絆によらなければならない。

(ニ) 経験の拡大 配偶者間の経験の視野を広げ、よりよい成熟をとげる働きにより、より人格の完成へと導かれる。配偶者間や他の人の福祉に責任を感じ、実行する機会を得る。Popenoe によると既婚者を過大に評価し、さらに子供をもつ夫婦に対しては完全に生きていと云っている。しかし、これは横の空間を測定したものであって、未婚者の他の側面の経験の拡大をはかれば比較することはできない。

夫婦関係の機能において、以上の四つの機能の他に安全の保障の働きを発見することができる。経済的、宗教的さらに外敵から護る働きであるが、後の親子、家族員の機能と重複するので除く。親子関係の機能

(ホ) 文化の継承 ここで文化 (Culture) というのは i) Acculturation (自然的な文化の移入) と ii) Inculcation (教え込むこと) の二つに分けられる。

i) Acculturation この場合の Culture は人が Nature (自然) に手を加えて採集し、もたらしたすべてのものを含み the way of social life (社会生活の様式) 等一切の社会的環境だといつてもよいものである。それら文化の中に子どもがひたっている内に順応してゆくものを指している。この中で人間 (man) は一個の個体として生れ、家族の既成の文化に接することによってそれを身につけ person となってゆくのである。必要なものを自分のものにしてゆく過程であり、無意図的教育が十分に作用している。従って親の行動様式 (Behavior) 等すべての広義の文化遺産を学ばせる機能として社会の一員になるための準備をする働きとして重要であるばかりか、後に親となって彼等の子供に人生の案内をしてゆく後々までも継承してゆくために一層重要な働きとなる。

ii) Inculcation これは子供に必要なものを注入し植えつけ教え込むことによって文化を継承してゆく機能であり、狭義の教育あるいは意図的教育といわれるもので、幼少の頃からの躾や行儀作法、宗教的心情、階層別ことば等が代表的なものである。これらを家庭で親が早期から教え導くのであるが、この内特に狭義の教育は、近年「学校」という社会の教

育機関で殆んどを取りあげ、元来の教育的機能の大部分の移譲がみられる。しかし、家庭で取扱われ、当然取扱われるべき分野は広く、その認識が不足するところから、今日家庭教育の再検討がなされ種々の批判を受け問題をおこしているのである。

この Acculturation と Inculcation が共に作用し「人間経験の組織の先がけをなす」(12) 機能が親子関係の最大の作用となる。

- (ヘ) 子供の養育教育 文化継承の機能に含まれる機能である。しかし、子供の養育、教育は生命維持の機能、経済的機能等と関係し、乳幼児期から青年期に至る長期間に亘り、なお家族の、特に親の負っている機能であるが故にあえて取りあげたい。イスラエル政府に現存するキブツにおいても幼少の頃から「私の家」といわれる「両親の家」においては子供の養育教育が一つの機能として認められる点をあげている。(13) ここからいかに教育的機能が分散し、移譲しても依然として存続するのではないかと思われる。子供を教育し愛育するところに相互の愛が成立すると考えられるからである。この機能の移譲として、今一つ社会福祉施設にて育てられている子を考えてみよう。ここでは人的接触が限定され、しかもその機会に恵まれないうが故に、人間特有の情線の適応が欠け、心身の発達が遅れるという、いわゆる施設病(Hospitalism)をおこすのである。この点からも家族で育てられなければならないことの必要性が理解される。
- (ト) 宗 教 近代の家族ではほとんど見られない機能である。古来の大家族制度においては「家」存続のためや、「家」を統治するため、あるいは精神的家の永続化のために大切な機能として家長の監督下で営まれていた機能である。これが欧米の家庭にとっては過去から現在に至り一つの統一精神の形成をなすよりどころとして親子間の継承が重要視されている。そこに独特の宗教的文化を造り出し、家族自体は小家族であっても——核家族——精神的には三世代位は近密に結ばれている。
- (チ) 娯 楽 娯楽の機能は家族から喪失した、と云われる程一家だんらんの中に共通の娯楽を発見することは少なくなった。しかし、これが正常な姿をもって他の社会制度へ譲り渡されたと云えるであろうか。マス・コミュニケーションは家族成員を結合するかつての娯楽を奪い去り営利主義の方針に左右されつゝある現状である。この意味からも娯楽が家族成員間にもたらす効果や正常なあり方を研究することにより好ましい機能の回復から社会制度として独立した組織を生み出す正しい方向づけを与えなければならない。

#### 家族員全体の機能

- (リ) 経済的相互依存 人間は生命現象を営む生物である。故に生命維持に必要な生活の手段を与えなければならない。家族は相互扶助を行う共同体であり、子供は独立できるまで親に経済的依存し、親の老後の生活に対しては子の扶養家族となって依存し、相互に責任と義務を遂行することによって経済的相互依存が成立する。現在の資本主義社会にては親は子を養育し、子は親の老後を預り、法的規制による「権利」「義務」ではなく、相互に愛情をもって遂行すべきである。今日においては家族間での生産的機能は社会に分散して行き消費面でさえもその一部は喪失しつつあるときえいわれている。しかし、一般的には家族経済(家庭経済)等で取りあげられるべき範囲はまだまだ山積で、他の機能(養育教育、娯楽)と関連づけ研究の余地は大いにあると思われる。
- (ヌ) 愛情的相互依存 家族員は愛情の要求を家族の相互依存にて満している。「個人がくつろぎを感じるのは家族においてである。(14) といわれるように、複雑で形式的社会面からの解

放は家族の個人対個人の心的交通の場・家庭でもって果されなければならない。

「家庭における両親の愛」について引用してみよう。「家庭における両親の愛は、これを二つに分けることができる。一つは対等の愛であり、いま一つは依存の愛である。前者は子供の親たる夫婦の間に見られるもので、この対等者同志の相互愛には、両者の間の相互理解を伴うことが必要である。これに対して親子の間における依存愛は、親にとっては一方的に、それ自身としての満足をもたらすものである。この依存愛への要求がいかに強いものであるかは、子なしの夫婦が親類縁者はいうまでもなく、見も知らぬ他人の子供でも、もらって育てている事実をみてもよくわかる。しかもこの二種類の家族愛は相互に相補って、親子と夫婦の間の絆をいよいよかたいものにするのである。」(15)

これらは本能的愛であり自我的要求として子から求められ、夫婦間で求め合うものを満たす機能である。夫婦間の親密な反応、親子間の養育教育の機能と関連の深い働きをなすものである。さらに、老後の親の扶養においても「感謝」からの当然の行いとしなければならない。これについて Starcke は「真の感謝は、むしろ自らの値いしない幸福と喜び、あるいは自らの予期しない幸福と喜びが、愛と共に与えられた時起る自然の感情であり、したがって親と子の間に真の感謝が可能となるためには、親の側にまず子に対する深い愛があると共に、子の側にもこれにこたえる深い愛がなければならない。」(16)と、単に権利や義務に根拠をもつものではなく子の自発的愛の態度でもって果されなければならないと主張している。

愛情的機能は家族結合にとって欠くべからざる、永遠に存在しつづける機能として諸学者が認めているのは以上のような由縁である。しかし、各家族でいかに愛情が表現され、いかなる家族形態を生み、いかなる機構をもつかは、現状ではあまり分析されていない。空理空論で理想を述べるのみならず、現状を分析することにより、より好ましい家族成員間の愛情的相互依存について探究し、伸展しなければならない。

- (ル) 安定 安定作用は家族関係が円満で以上述べた機能がとどこおりなく果され、家族の目的、関心、抱負を実現せんと努力している場合に感じられる。そして、どの機能が満身に営まれない場合でも、社会にとって、もしくは家族にとって健全な結合が望めない場合が多い。又、安定は女性側の結婚の動機として取りあげられている。(17) すなわち、女性は男性の動に対し、静を望む傾向が著しく、その度合は近年女性の社会的侵出が著しい反対に、強い要望を持っていると思われる。男性側においても攻撃的、殺伐的傾向は家族間の憩の場によって緩和され、明日への元気を回復（精神的にも肉体的にも）し、社会と家族の融合をはかっている。

これらの意味から家族の機能の内、なんらかが営まれない家族を分析してみると、社会的に、あるいは家族自体に病理現象を呈していることが多い。安定作用を欠いているからである。しかし、安定作用を計る完全な単位は存在しない。今後の家族関係は史的な考察から現実の個々の問題に着手し、単なる理想論の論述から科学的問題解決の方向へ目を投じなければならない。

以上、家族関係の機能は重複する点が多量に見受けられる。これらは家族が単一の機能を営む組織ではなく、多岐な機能を営み、物的、人的環境が複雑で、その条件の分析が非常に困難な由縁である。自然科学のように純粋な対象を発見し、とり出すことは不可能に近く、又それを作り出すことも、易ではない。しかし、家族関係の機能の探究は、それが家族結合の紐帯をなすがゆえに (18) なされねばならない課題である。

### 3. 家族関係の機構

家族の機能が順調、かつ正常に営まれている状態において家族が結合されていると見たが、それでは、結合される機構はどのようになっているであろうか。

家族の結合は次の(1)、(2)によって結合された変化に関する調整又は再調整により形成されるという。(19)

(1) 家族を関係づける諸関係の形態

(2) 家族間の相互作用を特徴づける心的態度の相互貫徹 (The interpenetration of attitudes)

これは家族員が横(夫婦関係)と縦(親子関係)の形態をとることであり、結合された家族の形態がとる調和的關係の確立と再確立の過程から成ることで、家族員の心的態度が相互に透しあい同等になることによって、家族員が give and take の過程を経ることである。(20) この心的態度の対等關係は、家族が同一の目的、関心、抱負を実現させようという意図から、心的態度や希望の同一化、単一又は統一、さらに夫婦の独立の感情へと発展するという。(21)

この結合の過程は組織的な相互作用の二つの型(22)を提供する。

調節作用 (Accommodation)

同化作用 (Assimilation)

調節作用は過去の異った背景を現在において同一化しようと意図するもので、相互に適応しあい問題を和解決し調停してゆく過程において見られる作用である。自我を抑圧し人格ある人間(person)の譲歩であり建設的意欲がある。夫婦関係においては、過去の条件の相違が大きければ大きい程その作用も強く働かなまればならぬ。二人の葛藤の要因として health, economics, response, culture, pattern of life の相違があげられ、the period of courtship 中にある過程の理解と融合(あゆみより)が必要とされる。(23)

同化作用は個人が記憶とか感情その他の心的態度を得る過程であり、個人の文化的生活をより豊かにする働きである。非常に徐々に成就され活動の同一性を導く。(24) 夫婦関係では相互の理解を深め、共通の目的に向い、同一の関心をもち抱負をいだき融合し、同化しようと努力する作用であって、the period of courtship から徐々に作用しはじめる。結婚関係の一致、不一致は「気質」の親密性の度合いが鍵をにぎるが、同化作用及び調節作用を続け同一の目的、関心、抱負のために努め相互貫徹する必要がある。親子関係では同化作用が働き、子は親の生活様式に同化し、同一化しようと努力する。子が幼児から児童期にかけては著しく親の価値を高く評価するのはその現われである。親も子の意見を尊重しようと努める傾向は同一化の現われであろう。さらに、子供達の間においても、出生順序に従って親や周囲の人々に期待のされ方、扱われ方の相違に気付き、期待に応じようと努力する。すなわち、家族の一員たることの自覚と責任を感じ、結合への道をたどる。

以上、家族関係の結合は機能のみでも解決されない、又機構のみでも理解されない。外的物理的、内的精神的多岐の要因を個々の家族に、あるいは大多数の家族について発見しなければならないことに気づいた。

非常に多くの問題点を毎日に投じている家族関係の探究に科学的な方法論の仮定を提示しながら今後問題解決にのり出す努力をしなければならない。家族関係の新開地にウォーミング・アップし、御指導下さった上村教授をはじめ、金子、島田両助教授に深謝し、Mowrer の文献による家族の結合についての一報告を終る。

- 注(1) 上村哲弥, 家政学原論, P. 34, 35
- (2) Mowrer, The Family, Its Organization & Disorganization, (1931) The Study of the Family, P. 31
- (3) 大橋 薫, 近代社会の特質, 大阪市立大学紀要, P. 29
- (4) Mowrer, The Family, The Study of the Family, P. 35
- (5) Burgess の「Family」の定義
- (6) Robert Park の言葉
- (7) Mowrer, The Family, Human Nature & the Family, P. 41
- (8) 依田 新, 教育心理学辞典, P. 328
- (9) Mowrer, The Family, Human Nature & the Family, P. 41
- (10) 津留 宏, 結婚の動機, 家庭科教育, 11' 63, P. 18
- (11) Mowrer, The Family, Human Nature & the Family, P. 46
- (12) // ibid., P. 48
- (13) 山根常男, 家族の本質, 社会学評論, Vol. 13 No. 4 2, 63
- (14) Mowrer, The Family, Human Nature & the Family, P. 50
- (15) 上村哲弥, 家政学原論, P. 106
- (16) 清水盛光, 家族, P. 273
- (17) 津留 宏, 結婚の動機, 家庭科教育, 11, 63, P. 20
- (18) 清水盛光, 家族, P. 113
- (19) Mowrer, The Family, Mechanism of Accord, P. 100
- (20) // ibid.
- (21) // ibid.
- (22) // ibid.
- (23) // ibid., P. 101
- (24) // ibid.